

---

# ひねくれ娘とヤンキー少年

水上鈴（みなかみれい）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひねくれ娘とヤンキー少年

### 【Nコード】

N2026U

### 【作者名】

みながみれい  
水上 玲

### 【あらすじ】

依存型ヤンデレのひねくれた娘とコガネシティでブイブイ言わせてたちまいヤンキー少年が出逢ってなぜか旅を続ける物語。ヤンキー少年の冴え渡るツッコミとひねくれ娘の毒を持ったボケの記録。

## 序章 ヤンキー少年の独り言

よく考えるとあれは俺にとって屈辱的な事件であり、

運命の出逢いだったのかもしれないな。

だって女に俗にいう『お姫様だっこ』なんだぜ。

いくら俺がチビだろうが俺は男なんだぞオ・ト・コ!!

150cmに届かない身長を恨んだのはこの時だけじゃなかったはずなのにな。

泣く子も黙るヤンキーとして知られて数年の、

ガキなこととはかわりない女に子供扱いされたのはショックだった。

すべてを一言で言い表すなら、

「どつしてこつなつた!」

だな。

どうしてくれるんだ?

なあ、『ひねくれ娘』よお。

**第一書 どうしてこうなった！bYヤンキー少年（前書き）**

ヤンキー少年の視点と独白。

## 第一書 どうしてこうなった！byヤンキー少年

ジョウト地方 コガネシティ 俺はその街で有名な不良集団の頭かしらをしていた。

が、それも数年前の話だ。

運悪く事故で足を悪くしてからは足を洗い、家業の花屋を手伝いながら生活していた。

ひさしぶりの休暇でカントーのタمامシデパートまでリニアで遠出した帰りのことだった。

気になっていた漫画などを買って浮かれまくった帰りの夕方、

コガネシティの駅のホームで衝撃的な出逢いがあったんだ。

「チクシヨウ、こういう時にこの足じゃなけりゃあラクにホームにあがれるのによお・・・」

足を滑らしてホームのリニアとプラットフォームの隙間に足を挟んだ。こいつはツイてねえなあ。

誰もこの自体に気づかず、己のことのみしか頭にないやつらばかりだ。

あともう少しでリニアが発車するというアナウンスが流れて身の危険を感じた時だった。

アイツが現れたのは。

アイツはどこも捉えていないような虚ろな目とホンモノの幽霊みたいな希薄な気配を纏わせていた。

チビで華奢だと言われ慣れている俺の体をヒョイっと抱えてそのまま俗に言う、

『お姫様だっこ』ってやつでホームの中央におろした。

これでも男なんだけどな。そんなに軽かったのだろうか、俺は。

そのまま何も言わずにぶいっと人ごみの中に消えようとしたアイツの左腕を掴んでこう告げた。

「アンタ誰だ？どうして俺を助けた」

そうしたら見た目通りの抑揚のない感情の一片すらも見受けられない薄気味悪さしか感じ無い声で言った。

「生きてることを諦めていない目をしていたから」

「なんだそりゃあ」

「忘れて」

『自分のこと』を忘れてと言ったのか、『助けた理由』を忘れて欲しいのか、

よくわからない言葉の真意が見えなかった。

霧みたいに不明瞭な存在で、するりと腕が俺の手から逃れようとしたときに、

両手でアイツの左腕をしっかりともって話さずに俺が慌ててわざとらしい言葉を続けた。

「な、名前と住所を教えるよな!!必ず礼は言い行くから」

**第一書 どうしてこうなった！b y ヤンキー少年（後書き）**

知り合いに起きた事件をもとに駅のホーム云々は執筆しました。

## 第二書 ふらりと現れては消えていく by ひねくれ娘

元ヤンキーの少年を助けたのは、

黒いジャージに少年と同じ黒いサングラスをかけた丁度少年と同年代の少女だった。

少年は少女に無理を言って連絡先と数日後に会う約束と連絡方法を確保した。

そして大通りまでは送ると言いはって並んで歩いた。

「そういえば、名前を聞いてなかったな」

少女はきよとんとして首をかしげたあと、

言葉の意味を理解したのかじとーっと少年を見る。

「なんだよ、その目は……しかたねえなあ。俺の名前は高橋龍之介<sup>すけ</sup>。」

ほら、俺が言ったんだから」

「……雪野笑<sup>ゆきのえみ</sup>。笑うって書いてえみ。」

「笑わないのか？」

その言葉を聞くとすぐに気を悪くしたのか走りだして人ごみの中に

消えて行った。

「悪かったのかもな」

そうつぶやいてももう届かなかった。

「それにしても、足速いな」

夕日は地平線に呑み込まれていく。

二人の間のわだかまりを残して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2026u/>

---

ひねくれ娘とヤンキー少年

2011年9月15日11時47分発行